琉球大学学術リポジトリ

沖縄県の学校場面における教師の呼称

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2010-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 美奈子, Takahashi, Minako, 髙橋, 美奈子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/16507

沖縄県の学校場面における教師の呼称

髙橋美奈子

The Address Terms by School-teachers in Okinawa

Minako TAKAHASHI

1．はじめに

対話の相手をどう呼ぶか、対話の相手にどう呼ばれるかについては、どのような語彙を選択するかによって、対話の相手と自分との関係性、つまり相手をどのように待遇しているのかを端的に表現する。鈴木（1973）は、このような対話の相手への呼びかけ語を、「話しの相手に言及することばの総称」として「対称詞」という名称を用い、国広（1990）は「話し相手に直接に呼びかけたり言及したりする語」を「呼称」、「話題にされる第三者を指す語」を「他称」として、鈴木（1973）の「対称詞」を二つに区別している。本稿では、「他称」については扱わないことから、「呼称」という名称を用いる。こと日本語には、他言語に比べ、待遇関係に応じた多くの呼称が存在すると言われている。呼称の中でも、二人称代名詞と言われているものには、「あなた」「おまえ」「きみ」などがあり、代名詞以外では「姓の呼び捨て」、「名の呼び捨て」、「髙橋さん」のような「姓＋敬称」、「髙橋先生」のような「姓＋役職名」など、数多くの呼び方がある。学校という比較的人間関係のバラエティーが少ないと思われる場面でさえ、学年による上下関係や、教師と生徒という師弟関係、友人における親疎関係といった様々な待遇関係があるので、生徒達は相手による待遇上の違いに配慮した呼称の使い分けが必要とされる（国立国語研究所　2002）。さらに、会話の相手との待遇差による使い分けのみならず、会話が行われる場面や場面の改まり度による使い分けも要求される（小林　1997、田中　1999、髙橋　2001）。このような社会言語学的規範に応じた使い分けが要求される点で、国立国語研究所（2002）では、「呼称」を敬語と同じ機能を持つとし、広い意味での敬語として捉えている。また、渡辺（1998）は、このような呼称という行動様式は、常識として社会の中に存在するもので、この行動様式には、呼ぶ人が相手をどう捉えているのかという待遇価（敬意）がつきまとうという。それゆえに、どのような相手にどういった場で、どの呼称を選択するのかは、社会の常識であると指摘している。

しかしながら、佐藤（1998）が指摘するように、所属する社会集団や地域社会が異なれば、そこで使われることばにも違いが生じる。それは、呼称の方言語彙だけに限らず、共通語と同一の語形を用いていても、待遇表現としての機能が地域により異なる（髙橋　2001、国立国語研究所　2002）。例えば、これまで首都圏を中心とした中高生の生徒間呼称では、「姓」をベースとした呼称が主で、さらにその「姓」に性差を示す「さん付け」や「くん付け」が学校場面の主要な呼称とされていたが、髙橋（2005a、2005b、2008）によると、沖縄県の中高生による呼称では「姓」ベースの呼称はほとんど用いられておらず、「名の呼び捨て」が主要な呼称である。さらに、「名の呼び捨て」の使い分けを見ると、「同性同級生」「異性同級生」「同性下級生」の位置づけがほぼ等しく、首都圏における待遇意識とは大きく異なることが明らか

＊ 教育学部生涯教育課程子ども地域教育コース

にされている。こうした違いは、待遇意識が確立されていない中高生という年代ゆえに起こるのだろうか。あるいは、地域が異なることにより学校社会で用いられる呼称の待遇表現としての機能が異なることによるのだろうか。髙橋（2001）では、こうした「名」で呼び呼ばれあう関係が成り立つのは、学校場面が家庭同様の「ウチ」社会とみなされているがゆえと捉えているが、それでは沖縄県での呼称の運用は待遇表現としての機能を持ち合わせてはいないのであろうか。

本稿では、首都圏とは異なる呼称が用いられる沖縄県の学校場面に焦点を当て、そのような呼称が受け入れられている学校という場における待遇表現としての機能を、生徒と同じく学校社会の一構成員であり、そのような生徒の呼称を受け止めている教師の呼称の実態から探ることとする。

以上を踏まえて、本稿では、2005年に刊行された拙著『平成17年度科学研究費補助金助成報告書（若手研究（B）課題番号14710376）沖縄県における人称表現の実態』で提示したデータの中から、沖縄県全域の中学校教師と高校教師を対象とした呼称の調査結果に基づいて、沖縄県の学校場面で教師によって使われる「呼称」を明らかにし、沖縄県の学校場面における「呼称」の待遇価としての機能を探ることを目的とする。

2．調査概要

2．1．調査対象者

本調査は前述した報告書で示された沖縄県全域の中学校と高等学校を対象とした調査報告データより、中学校と高等学校の教師を対象とした調査に限定して論述する。同報告書での調査対象地域は、沖縄県全域の主な方言区画に配慮して、国頭区域、中頭区域、那覇区域、島尻区域、宮古区域、八重山区域と６区域に渡り実施した。調査対象地域の抽出法は、各区域における主な方言発祥地の市町村を抽出し、その中から対象校を抽出するという層化多段抽出法によった。前述した調査では、生徒については調査対象者が膨大であったので、中学生と高校生を分け、区域ごとに分析を行ったが、教師については十分な調査対象者数を得られなかったので、中学校と高等学校の教師に分けることはせず、「沖縄県の教師」という一つの属性としてまとめた。各区域の調査対象者数の内訳は表１の通りである。

表１で示したように、各区域のいくつかの学校から万遍なく調査対象者を抽出した。しかし、島尻区域においては中学校１校しか協力を得られなかったため、調査対象者が他の区域に比べると少なくなっている。

次に、調査対象者の出身地を以下の表２に、そして世代を表３に示す。出身地とは、これまでにもっとも長く居住した場所のことをさす。表２を見ると、87.9％もの教師が沖縄県出身であり、大半を占めていることがわかる[i]。

続いて、表３を見ると調査対象者は30代が最も多く、次いで20代が多いことがわかる[ii]。

また、沖縄県以外で１年以上暮らした経験の有無についても尋ねたところ、306人のうち、「ない」の回答が133人（43.5％）、「ある」が155人（50.7％）、「無回答」が18人（5.9％）となり、県外居住

表１　調査対象者数の区域別・性別構成

	国頭区域	中頭区域	那覇区域	島尻区域	宮古区域	八重山区域	合計人数
男　性	38	29	23	3	21	26	140
女　性	30	39	31	3	20	27	150
無回答	2	1	10	0	0	3	16

表２　調査対象者の出身地別構成（（　）内の数値は％）

出身地	沖縄県	北海道・東北	関　東	信越・北陸	東　海	中国・四国	九　州	無回答	合計人数
人　数 （％）	269 (87.9)	2 (0.7)	3 (0.9)	1 (0.3)	1 (0.3)	2 (0.7)	11 (3.6)	17 (5.6)	306 (100.0)

表３　調査対象者の世代別構成（（　）内の数値は％）

世　代	20代	30代	40代	50代以上	無 回 答	合計人数
人数 （％）	77 (25.2)	109 (35.6)	60 (19.6)	43 (14.1)	17 (5.6)	306 (100.0)

表４　呼称における想定した話し相手

【相手】学校内の相手（目上）・・・［同性年上教師］
　　学校内の相手（同等）・・・［同性同僚］、［異性同僚］
　　学校内の相手（目下）・・・［男子生徒］、［女子生徒］
【場面】改まった場面・・・［男子生徒・授業中］、［女子生徒・授業中］
　　くだけた場面・・・［男子生徒・放課後］、［女子生徒・放課後］

歴が「ある」の回答が若干「ない」の回答を上回った。さらに、両親の子供時代（５歳から13歳まで）の生育地も、父親・母親のいずれも83％前後が沖縄県出身であった。つまり、調査対象者のうちの多くが沖縄県で育ち、両親の地理的背景も沖縄県である点から見ると、本調査対象者は生粋の沖縄県人が大半であると言えるだろう。しかし、県外での居住歴について「ある」と回答したものが半数以上いることから、県外での言語運用から意識的あるいは無意識的に影響を受けているものがいる可能性があることも否定できないので、分析の際にはこの点に注意を要する。

２．２．調査方法

本調査は、アンケート調査票を用いる方法で2004年９月に実施した。アンケート調査票は、30分前後で回答できるものとし、郵送調査法により行った。

本稿では、学校場面における教師の呼称を明らかにすることを目的としていることから、全調査項目[iii]の中から呼称の使い分けに焦点を当てる。具体的な調査項目は、「各相手のことを何と呼ぶか」「各相手からは何と呼ばれているか」「各相手からの呼ばれ方の好悪」の３項目である。

前述した通り、日本語には多様な呼称があり、同じ相手に対しても、必ずしも一つの語形のみを用いるわけではないことから、調査票の回答方法は、国立国語研究所（2002）に倣い、想定した話し相手ごとに、掲げた語形全てに○（使う）か×（使わない）を付ける回答方法[iv]を採用した。

まず、「各相手のことを何と呼ぶか」という調査項目について、想定した話し相手とその選択肢について述べる。まず、待遇上の異なりを見る上では最も重要な要素となる話し相手であるが、前述した通り、相手の社会的な上下関係・親疎関係のみで語形を選択し使い分けているわけではないので、表４で示した通り、大きく相手と場面による使い分けに区分し、相手の性や年齢による位相差、学校場面における待遇上の上下関係と親疎関係に配慮し、［同性同僚］、［異性同僚］、［同性年

i　本調査では、表２にある他府県出身者も調査対象者に含めた。なぜなら、調査対象者の１年以上の県外滞在経験の有無を聞いた調査項目で、県外滞在経験者が全体の半数以上おり、さらに、滞在年数にもばらつきがあり、言語選択への影響が必ずしも出身地の影響ばかりとはいえないことから、沖縄県以外の出身者を調査対象者から外すことはしなかった。

ii　調査対象者の世代別構成比についてであるが、この年度の沖縄県全体の教師の世代別構成についてのデータを入手できなかったことから、全体における本調査の構成比を比較することができなかった。また、調査対象者は前述した髙橋（2005a）の調査で対象とした生徒が在籍する学校の教師全てに協力を仰いだため、専任・臨時教員の別は問わなかったことから、若い世代の調査対象者が多くなった可能性もある。

iii　拙著『平成17年度科学研究費補助金助成報告書（若手研究（B）課題番号14710376）沖縄県における人称表現の実態』で使用したアンケート調査票は、本稿で言及した呼称（対称詞）に加えて、自称詞、沖縄県で用いられる主な方言語形の理解度・使用度、相手に応じたことばづかいの注意度、人称表現に関する意識調査を実施したが、本稿では教師が選択した呼称の使い分けに焦点を当てていることから、呼称以外の項目についての論究は避ける。

表５　呼称における主な選択肢

１．きみ　２．あなた　３．あんた　４．おまえ　５．おたく　６．じぶん　７．やー ８．姓の呼び捨て　９．姓＋さん　10．姓＋くん　11．名の呼び捨て　12．名＋さん 13．名＋くん　14．名＋ちゃん　15．ニックネーム　16．姓＋先生　17．名＋先生　18．先生 19．その他（　　）

上教師]、[男子生徒]、[女子生徒][v] の計５人を想定した。また、これらの対人関係における違いに加えて、場面の違いによる待遇差を調査するために、同じ相手に対する場面の改まり度の異なった「男子（女子）生徒と授業中に話すとき」（以下、[男子（女子）生徒・授業中]）と「男子（女子）生徒と放課後に話すとき」（以下、[男子（女子）生徒・放課後]）の２つの場面を設定した。

また、呼称の選択肢については、先行研究（八代　1983、吉田　1990、金丸　1993、小林　1998、国立国語研究所　2002）で一般的に用いられるとされる主な呼称に、ウチナーヤマトグチの二人称代名詞「やー」を加えた。さらに、相手が教師の場合は「姓＋先生」、「名＋先生」、「先生」の選択肢を追加した。

次に、「各相手から何と呼ばれているか」という調査項目についてであるが、尾崎（1998）、髙橋（2001）、国立国語研究所（2002）の結果を踏まえ、過度な調査項目数による調査協力者への負担を避けるため、話し相手として「一番親しい同性同僚」と「担当しているクラスの生徒」の２名のみを想定した。さらに、「各相手からの呼ばれ方の好悪」の調査項目については、これら２名からの呼ばれ方に対する好き嫌いについて、表５で掲げた呼称の主な語形それぞれに「好き」、「中立」、「嫌い」のいずれかを選択するよう指示した。

なお、回収された調査票は、全て統計解析プログラム SPSS と EXCEL を用いてデータ作成し、統計的処理を施した。

３．調査結果

３．１．各相手に対する呼称

まず、教師が職場にいる他の教師のことを何と呼んでいるかについて、その結果を以下の図１から図３に示す。

図１と図２を見ると、同僚に対しては、相手の性別を問わず、「名＋先生」と「姓＋先生」の数値が大幅に高い。ただし、男女いずれの教師も女性教師に対しては、「名＋さん」の数値が高い。また、「名の呼び捨て」は、男性教師が比較的相手の性を問わず用いる表現となっている。図３で示した[同性年上教師]に対しては、男女ともに「名＋先生」、「姓＋先生」が数値の大幅に高い表現であるが、男性教師の場合は「姓＋先生」の数値が最も高く、女性教師の場合は「名＋先生」の数値が最も高い。また、年上教師に対しては、同僚教師に対する場合と比べると、男女ともに「さん付け」が少ない結果であった。

これまでに、首都圏を中心とした中学・高校の教師を対象にした先行研究の一つである、Tanaka（1995）の自然談話調査によると、「先生」、「姓＋先生」、「姓＋さん」が場面の改まり度に応じて使い分けられており、年上教師に対しては、男性教師は「姓＋さん」を使用するが、女性教師は相手との年齢の違いを配慮して「さん付け」は使わないという結果を報告している。一方、吉田（1990）では、放課後・職員室での教師から教師に対する呼称は、学習者の立場を配慮して、「姓＋さん」よりは「先生」や「姓＋先生」が一

iv　本調査の予備調査として実施した髙橋（2001）では、小林（1997）に倣い、想定させた話し相手ごとに最も使う人称表現と使うこともある人称表現を一つずつ選択させる方法を採ったが、その際、使うこともある人称表現をいくつか回答する回答者が出たことから、本調査では、使用する全ての語形を選択させる国立国語研究所（2002）の方法を採ることとした。

v　髙橋（2003）では、本稿で想定した５人以外にも、学校場面と家庭場面との場面による違いや家庭場面における上下関係に配慮し、[同性のともだち]、[年上家族]、[年下家族] も設定したが、本稿では学校場面における待遇関係に焦点を当てていることから、それ以外の待遇関係については論及しない。

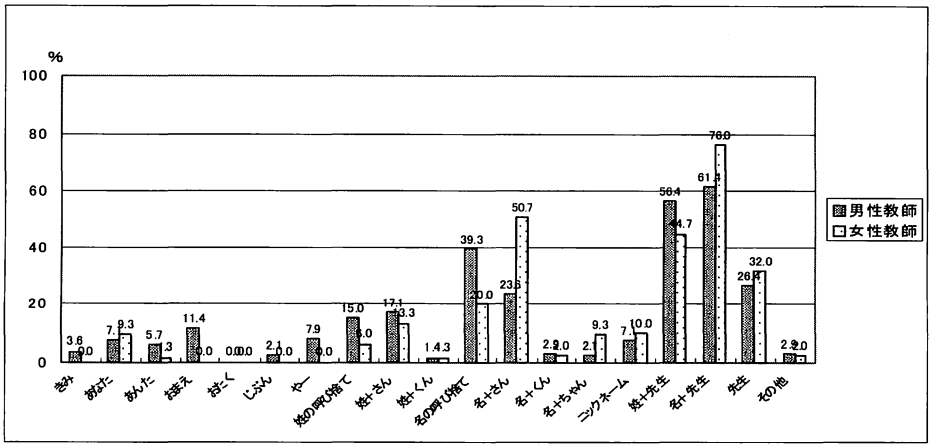

図１　「同性同僚」に対する呼称

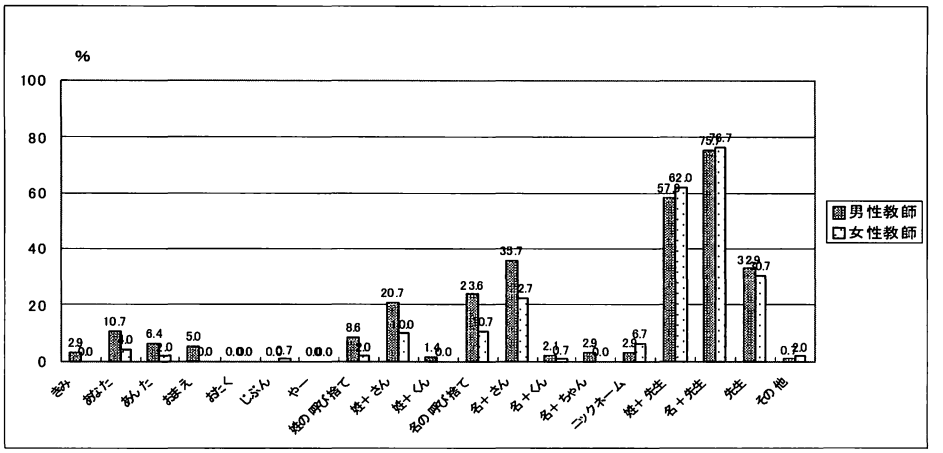

図２　「異性同僚」に対する呼称

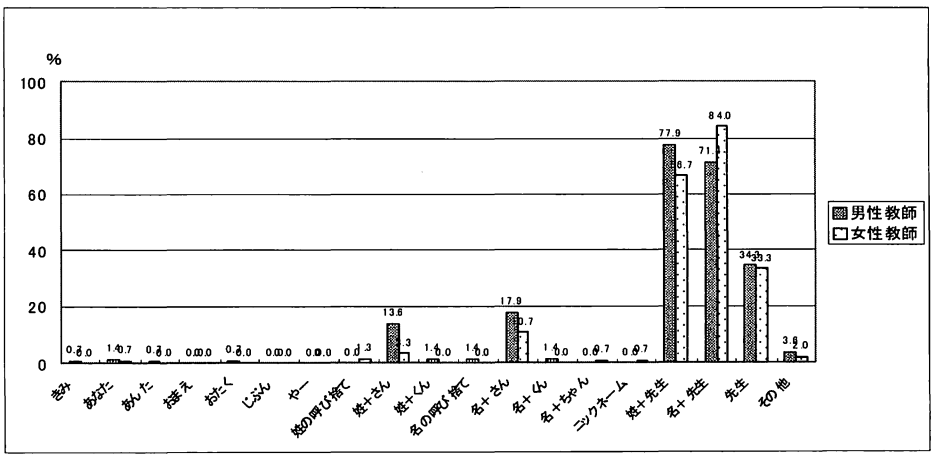

図３　「同性年上教師」に対する呼称

般的であるとしている。さらに、そのような使用が慣習化されるに従い、「先生」という用語は、相手の教師との年齢差や親しさの違いにより「さん付け」になるなどという待遇関係に配慮した関係用語ではなく、絶対用語としての色彩を濃くしてきたと指摘している。

この点を踏まえると、沖縄県の教師については、相手が年上教師の場合には「さん付け」がほとんど用いられていない状況であることから、「先生」という用語は必ずしも絶対用語として機能しているわけではなく、相手が年上の場合と同僚の場合とで区別する相対的な待遇表現として機能している姿がうかがえる。

また、相手の性別や年齢を問わず、県内の教師間の呼称では、「名」を用いた呼び方が「姓」を用いた呼び方同様に一般的であることがわかった。おそらく島嶼地域ゆえに同姓が多いことによる混乱を防ぐためであると推察されるが、職場に同姓がいる場合のみに「名」を用いた呼び方をし、いない場合には「姓」のみの呼び方をしているかどうかは、本稿では調査が及ばなかった。

次に、生徒に対しての呼び方について見てみる。教師が生徒に対して用いる呼称の研究は、吉田(1990)、金丸（1993)、小林（1998)、国立国語研究所（2002)、小林（2008）があるが、男子生徒へは「姓＋くん」「姓の呼び捨て」が多く、女子生徒へは「姓＋さん」「姓の呼び捨て」が多用されるというのが主な結果である。特に、女性教師は「姓＋さん」「姓＋くん」といった「さん付け」「くん付け」を使用し、男性教師は「姓の呼び捨て」を用いることが多いという。この結果とやや異なるものとして、宮城県の生徒を被験者とした金丸（1993）の調査では、男性教師は「姓の呼び捨て」と同等の比率で「名の呼び捨て」も多い結果を示している。しかし、教師による「名の呼び捨て」については、東京の中高生が教師から「姓の呼び捨て」をされること以上に「名の呼び捨て」にされることを「嫌い」と答えている生徒が多いという尾崎（1998）の調査結果から、「呼び捨ての中でも（教師の学生への）『名呼び捨て』の適用は難しいようである」（尾崎　1998：40）との指摘もある。

では、沖縄県の教師は生徒を何と呼んでいるのだろうか。その結果を以下の図４から図７に示す。

図４から図７を見ると、男女の別を問わず、数値が大幅に高い表現は「名の呼び捨て」であることがわかる。場面の改まり度の違いで見ると、授業中に比べ放課後は、さらに「名の呼び捨て」の数値が高くなっている。首都圏の先行研究で多く使用されていた「さん付け」「くん付け」については、女性教師の場合は、女子生徒に対し「名＋さん」、男子生徒に対しては「名＋くん」が「名の呼び捨て」の次に高い数値の表現である。一方、男性教師は「名＋さん」「名＋くん」と同様に「姓の呼び捨て」の数値が高い。また、二人称代名詞の使用を見ると、男性教師は「おまえ」を比較的用いているのに対し、女性教師はくだけた場面である放課後であっても、ほとんど用いていない。

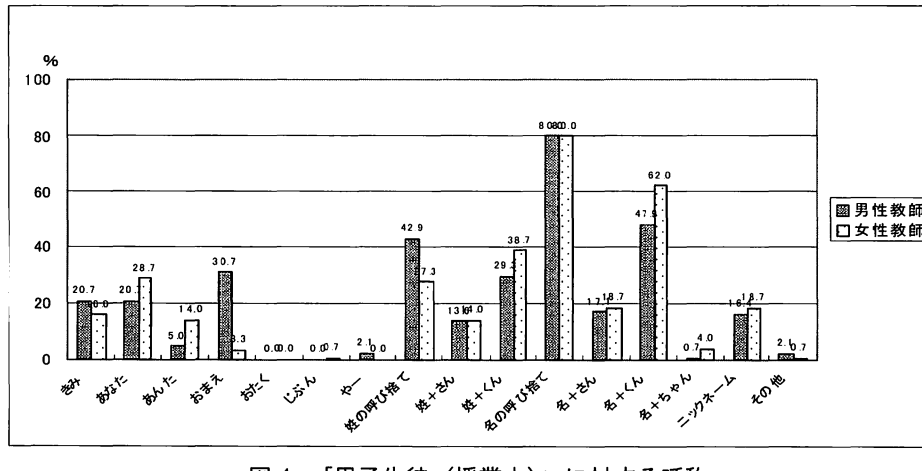

図４　「男子生徒（授業中)」に対する呼称

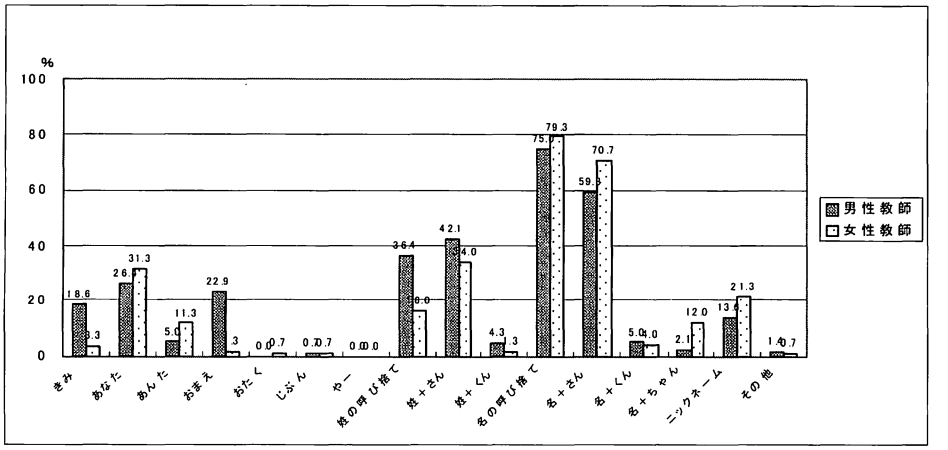

図５　「女子生徒（授業中）」に対する呼称

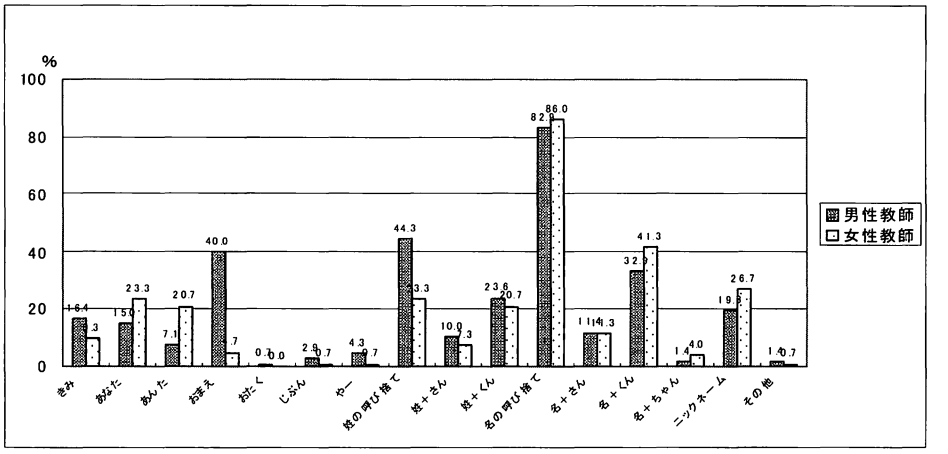

図６　「男子生徒（放課後）」に対する呼称

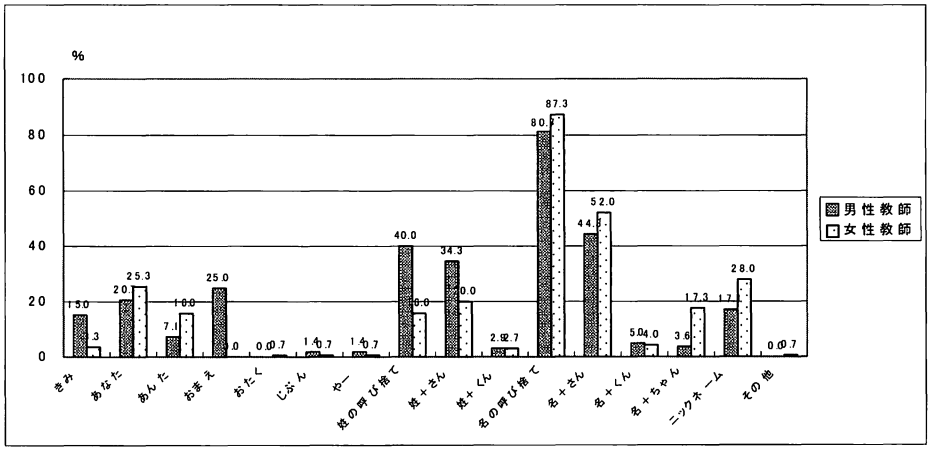

図７　「女子生徒（放課後）」に対する呼称

こうしてみると、沖縄県の教師は首都圏の教師同様に、男性教師の方が女性教師よりぞんざいな呼称を用いていると言えるが、男性・女性教師ともに「名の呼び捨て」が最も高い数値の表現であることからすると、沖縄県の教師は首都圏の教師に比べると、生徒の性差による待遇意識の区別が弱い呼称の使い方をしていると言えよう。つまり、生徒を男女の区別なく平等に個として遇する傾向があると言える。

3．2．各相手からの呼ばれ方とその評価

では、教師は同僚と生徒から何と呼ばれているのだろうか。また、その呼び方をどう受け止めているのだろうか。以下の図８は同性同僚教師からの呼ばれ方、図９は同性同僚教師からの呼ばれ方に対する評価である。

図８を見ると、同性同僚からの呼称で数値が最も高いのは、男女問わず「名＋先生」である。しかし、男性教師の場合は、「名＋先生」と「姓＋先生」がほぼ同じ６割で、「名呼び捨て」と「先生」が約４割と続く。一方、女性教師の場合は、「名＋先生」が８割以上と大幅に高い数値であり、「名＋さん」と「姓＋先生」が4割と続く。こうしてみると、前節の図１で示した[同性同僚]に対する呼び方と図８の呼ばれ方は、選択される語形とその序列も非常に似通っており、呼応した関係にあると言える。つまり、相手から呼ばれる呼び方で相手を呼ぶ傾向があることがわかる。次に、その呼ばれ方に対しての「好き」の評価であるが、男性教師の場合は、実際そう呼ばれている表現ほ

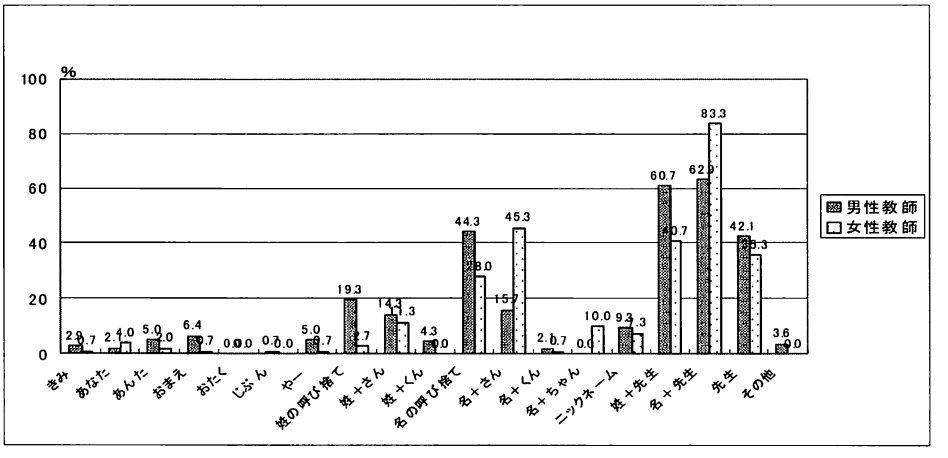

図８　同性同僚からの呼称

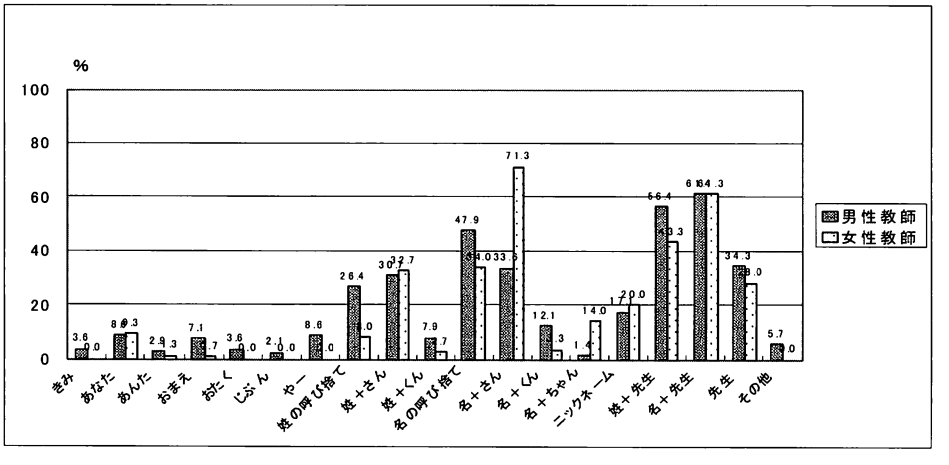

図９　同性同僚からの呼称－「好き」の評価

ど「好き」という関係がうかがえるが、女性教師の場合は、状況が少々異なる。女性教師の場合も男性教師同様に、実際そう呼ばれている表現ほど「好き」の数値が高いが、「名＋さん」だけは実際呼ばれているよりも「好き」の数値が大幅に高い。前述した図３の[同性年上教師]に対する呼称では、「先生」という役職呼称が好んで用いられ、「さん付け」がしづらい状況を指摘したが、一般的に「名」を伴う呼称は「姓」を伴う呼称よりも待遇価が低いと捉えられていることを踏まえると、このような待遇価の低い「名」を伴う呼称を用いるがゆえに、相対的な待遇関係を示すための方略の一つとして、教師間での年齢差による待遇価の違いを「さん付け」と「役職名付け」との違いで示そうとしている表れと言えるのではなかろうか。

次に、生徒からの呼ばれ方を図10に、その呼ばれ方の評価を図11に示す。

図10を見ると、女性教師の場合は、「名＋先生」の数値が最も高く、９割を超えている。次に、「先生」が８割、「姓＋先生」が６割と続く。一方、男性教師の場合は、「先生」が８割と最も高く、続いて「姓＋先生」が８割弱、「名＋先生」が６割である。その呼ばれ方の評価であるが、「先生」は男女ともに実際に呼ばれているほどには評価が高くない表現である。個を明確にしてもらいたいという表れであろう。また、男性・女性教師を比較すると、女性教師の場合は、「姓＋先生」の数値が最も高く、次に「ニックネーム」「名＋先生」と続く。男性教師の場合は、「ニックネーム」の評価が大幅に高く、次に「姓＋先生」「名＋先生」

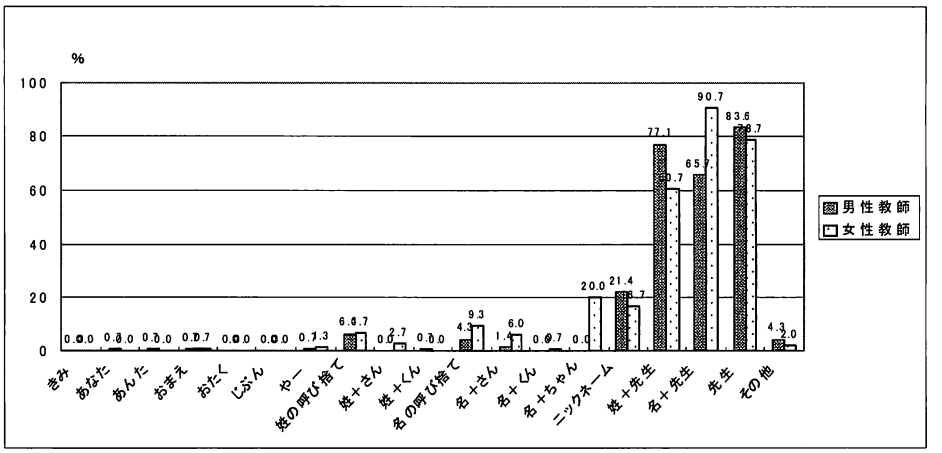

図10　生徒からの呼称

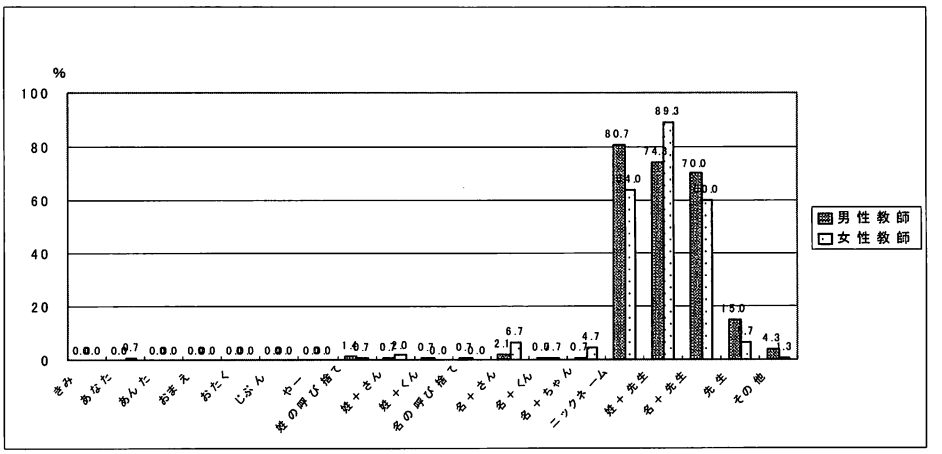

図11　生徒からの呼称－「好き」の評価

の評価が高い。こうしてみると、男性教師は実際には「先生」や「姓＋先生」といった距離を置いた表現で呼ばれていることから、「ニックネーム」という最も親密さを示す呼称を好んでいると考えられる。一方、女性教師は前述したように相手との年齢差による待遇価の違いを呼称の選択で示そうとする傾向がある。生徒についても師弟関係という待遇価に応じた呼称を選択してもらいたいという表れが「姓＋先生」の評価の高さにつながっていると言えよう。同時に、女性教師も男性教師同様に「ニックネーム」の評価が実際に呼ばれているよりも大幅に高い。これは、「姓＋先生」という改まった呼び方を求める一方で、親しみをこめた「ニックネーム」や「名＋先生」という、場面による使い分けを生徒に要求している姿と解釈できる。この点については、今後、学校場面における自然談話分析から呼称の使い分けを分析する必要があるだろう。

また、教師に対する「ニックネーム」と言ったときに、具体的に姓名のどの部分が用いられているのか、役職名の「先生」や敬称「さん」などは付けられているのかいないのか等によっても、教師に対する待遇価の受け止め方が見られるだろう。この点についても、今後の課題としたい。

４．おわりに

以上、本稿では沖縄県の教師による呼称の実態を明らかにしてきた。まず、沖縄県においては、これまで髙橋（2005a、2005b、2008）の沖縄県内の中高生の呼称の実態で明らかにしてきたように、教師においても相手の待遇差に関わらず「名」ベースの呼称が多用される実態が明らかとなった。また、生徒に対する呼称については、男女差という社会的要因による呼び方の区別が首都圏ほど明確ではないことから、性差という待遇意識を表すというよりは、個を表す表現として機能していることが明らかになった。一方、教師間の年齢差という要因については、役職名が相対的な待遇表現として機能していることがわかった。日本社会では、鈴木（1973）や渡辺（1998）で言われているように、下位のものが上位のものを呼称する場合には名前を敬避し、代わりにその親族名称、役職名などを使って呼称しようとする規範意識が強く存在する。本調査では、こうした日本社会の呼称の常識は、「名」をベースとした呼称を主に用いる沖縄県の学校社会においても、強く存在していることが明らかになった。特に、沖縄県では「名」をベースとした呼称を多用するがゆえに、役職名は従来の日本社会でのそれより、さらに待遇意識を表す相対的な用語として機能していると言える。

また、呼称の評価についての調査では、教師が生徒に場面に応じた呼称の使い分けを獲得してほしいという要望の現れを垣間見ることができた。「姓＋先生」「名＋先生」「ニックネーム」という呼称を場面の改まり度や緊張度に応じて、生徒は同じ教師に対して使い分けが要求されている。

最後に、絶対的な個を表す「名」がベースに用いられる地域社会では、ともするとお互いが親密さだけを求めていると誤解されかねないが、「名」をベースとしながらも、役職名や「ニックネーム」などを用いることにより、相対的な待遇表現として多様な呼称が機能していることが明らかになった。

今回の調査では、教師の世代差までは考察が及ばなかったが、ある意味特殊な学校という場に勤め始めたばかりの20代の教師については、今後、呼称の運用の仕方も勤務年数とともに変化していくことが考えられるので、教師の呼称の変化、さらには場面に応じた呼称の選択の仕方についても今後の課題としたい。

Tanaka（1995）では、日本語と英語の「呼称」運用の対照分析から、話している相手をどう呼ぶかは文化によって異なるため、無意識に母国の「呼称」の習慣を外国語に適用すると、「よそよそしい」または「なれなれしい」というような印象を相手に与えかねないと指摘している。髙橋（2001）の沖縄県内外の大学生を対象とした調査では、このような呼称の違和感は、外国語だけに限らず、国内の地域間にも生ずることが明らかになっている。それゆえに、本調査で考察した個別具体的な地域における呼称の待遇表現としての機能を明らかにすることは、日本語の多様性を明確にし、維持するためにも今後も必要な作業だと言えよう。

【謝辞】

調査実施に際してご協力いただいた沖縄県内の各市町村の教育委員会の皆様方、調査にご協力してくださった生徒ならびに教師の皆様方にこの場を借りて深くお礼申し上げる。

【付記】

本研究は、平成14年度～16年度科学研究費助成金（若手研究（B）課題番号14710376　研究代表者　髙橋美奈子）を受けた研究の一部をまとめたものである。

【引用文献】

尾崎喜光（1998）「生徒たちはどう呼ばれたいと思っているか」『日本語学　８月号』Vol.17：37－44頁、明治書院

金丸芙美（1993）「人称代名詞・呼称」『日本語学　５月臨時増刊号』109－119頁、明治書院

国広哲弥（1990）「『呼称』の諸問題」『日本語学　９月号』Vol.９：４－７頁、明治書院

国立国語研究所（編）（2002）『国立国語研究所報告118　学校の中の敬語１－アンケート調査編－』三省堂

小林美恵子（1997）「自称の獲得－高校生へのアンケート調査から－」『研究誌　ことば』18号：12－26頁、現代日本語研究会

小林美恵子（1998）「学校の呼称－女性教師の呼称『～クン』を中心に－」『日本語学　８月号』Vol.17：32－36頁、明治書院

小林美恵子（2008）「授業談話データベースによる実態調査－教師は生徒をどう呼ぶか」『研究誌　ことば』29号：54－72頁、現代日本語研究会

佐藤和之（1998）「方言主流社会の呼称行動と言語意識」『日本語学　８月号』Vol.17：12－20頁、明治書院

鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波新書

髙橋美奈子（2001）「沖縄県における女子大学生の人称表現」『研究誌　ことば』22号：78－90頁，現代日本語研究会

髙橋美奈子（2005a）『沖縄県における人称表現の実態調査』平成14年度～平成16年度科学研究費補助金若手研究（B）研究成果報告書，研究代表者　髙橋美奈子，課題番号14710376

髙橋美奈子（2005b）「人称表現の使い分けに見られる待遇関係－八重山区域の中学生を中心に－」『言語文化論叢』２号：37－63頁，琉球大学言語文化研究会

髙橋美奈子（2008）「沖縄県の学校教育における人称表現の研究」『2008年度　第２回日本語教育学会研究集会』口頭発表

田中ゆかり（1999）「大学生の呼称－場面・上下・性の異なる相手からの呼ばれ方－」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報　第７号』105－120頁、青山学院女子短期大学総合文化研究所

八代京子（1983）「高校生の呼称」F.C.パン他（編）『機能によることばの分析』文化評論出版

吉田裕久（1990）「学校における先生・子供の呼称」『日本語学　９月号』Vol.９：25－31頁、明治書院

渡辺友左（1998）「『呼称』という論点」『日本語学　８月号』Vol.17：４－11頁、明治書院

Tanaka, Noriko (1995) 'An Investigation of Japanese Address Terms: how to address colleagues in a teachers' room at school' 『明海大学外国語学部論集』第７集：75－84頁